

Ta Prohm 碑文にみられる数値について

—カンボジア碑文考 (1)—

岩 本 裕*

On the Numerical Values on the Ta Prohm Inscription of Jayavarman VII

Yutaka IWAMOTO*

The inscription (K273) is written on the four faces of a stele and has 290 lines. Comprising 145 verses in Sanskrit, this inscription is one of the longest hitherto known to us. The contents deal with various topics. Among these manifold aspects of this inscription, a noticeable feature is the numerals, i.e. v. 51 gives the total quantity of rice consumed each year by the people related to this temple, then vv. 53-61 describe the articles of food levied from farmers and traders, and the

amount. In this paper, Indian units of weights and measures are applied by way of experiment to calculate the numerals in this inscription, because the Khmer Kingdom in Cambodia was from the beginning wholly under the influence of Indian culture, and at the same time, the units used at that time in the Khmer Kingdom are still unknown. Though only an experiment, the result would probably not be far off the mark.

I

インド文化を古くから受容したカンボジアの現地史料は、西暦5世紀に属するとされる Srideb (Si T'ep, Sri Thep, Si Thep) 碑文 (K499) で、現在伝わる6行の断片的文面からみて、韻律正しく書かれた Skt. 語の碑文である [Chhabra 1935: 54]。そのうち、14世紀(?)とされる Angkor Wat 碑文 (K529) に至るまで、IC [Vol. VIII] に載せられている Skt. 碑文はその数443に達し、全体の1,005碑文の約44%を占める。これを世紀別に分類すると、表1の通りである。表中、Aは Skt. 語のみの碑文、Bは Skt. 語と

表1

区分 世紀	時 代*	A	B	計
V	扶南の時代	7	0	7
VI		44	21	65
VII	真臘 (先アンコール王国時代)	27	20	47
VIII	陸真臘と水真臘の時代	9	5	14
IX	Hariharālaya (アンコール創設期)	76	33	109
X	アンコール第1期	39	49	88
XI	アンコール第2期	20	28	48
XII	Mahidharapura 朝の時代	28	9	37
XIII	アンコール末期 (1432 アンコール放棄)	5	0	5
XIV		1(?)	0	1(?)
XV		0	0	0
不明		22	0	22

* 創価大学文学部; Faculty of Letters, Soka University, Tangichō 1-236, Hachijōji, Tokyo 192, Japan

* cf. IC [Vol. VIII: 11-12].

Khmer 語の混在する碑文を示す。

扶南 および 真臘（先アンコール王国）の時期はしばらく 措くとして、Skt. 碑文は Hariharālaya の時期以後 Mahidharapura 王朝の時代に至るまでの 4 世紀にわたる、いわゆるアンコール時代に多いことが知られると同時に、13 世紀には急激に減少していることが指摘されよう。1220 年ごろに Jayavarman VII が死没したあと、14 世紀前半までは Mahidharapura 王朝系の王が 5 代にわたって続くのであるが、Skt. 碑文の減少は Cœdès のいう The Crisis of the Thirteenth Century and the Decline of Indian Cultural Influence [Cœdès 1966 : Pt. 4] のひとこまを物語るものというべきである。しかも、この事象に関連して、次の事実も見落してはならないであろう。現在知られている Jayavarman VII の碑文の中で年次の知られるのは表 2 の通りであるが、その言語をみると、その治世の後半の碑文はすべて Khmer 語であることが知られる。

表 2

Śaka 紀元	1108	1113	1114	1117	1118	1123	1126	1128	1135
A. D.	1186	1191	1192	1195	1196	1201	1204	1206	1213
言 語	Skt.	Skt.	Kh.	Skt.	Kh.	Kh.	Kh.	Kh.	Kh.

なお、年次不詳の 57 碑文の中で Khmer 語のものは実に 48 碑文である。

こうして、Jayavarman VII の時代における碑文の言語は Skt. から Khmer 語に漸次移行していった跡を示すが、Jayavarman VII の Skt. 碑文はなお極めて興味深い事実を示している。まず第 1 に、K908 : Pra Khan 碑文、K273 : Ta Prohm 碑文のごとく、極めて長篇の碑文のあることである。前者は石の 4 面に 179 詩頌が刻まれており、後者も同じく石の 4 面に 145 詩頌がみられる。前者は、インド本土を含めて今日知られてい

る Skt. 碑文の中で最も長篇のものであろう。また、Phimanakas の東側階段の前にある碑文 (K485) も、石の 4 面に刻まれている。石が砕け、碑銘は相当に傷んでいるが、全体で 102 詩頌あることが知られる。次に、内容が豊富で多彩を極めているという事実である。この点については、次節に記す K273 : Ta Prohm 碑文の内容をみれば、ただちに認められよう。第 3 は、未だカンボジアの Skt. 碑文のすべてを読んではいないので、決定的なことはいえないのであるが、Jayavarman VII の碑文の Skt. 詩頌に関するかぎり、筆者のごとく Skt. 詩文を読みなれた者には、少なくとも Java のわずかばかりの Skt. 碑文¹⁾よりは理解し易い感じがするのである。これが何を意味するか今のところ暗中模索の域を出ないが、Skt. 詩頌として正統的であるとは断言できない。何故なれば、Jayavarman VII の Skt. 碑文では前頌の Pada D の語句が次頌の Pada A に意味上連続する場合があるからである。Skt. 詩頌では絶対にみられない現象である。

II

ここで問題とする Ta Prohm 碑文の内容の概

略を記すことにする。前述のように、この碑文は石の 4 面に 290 行に書かれており、145 詩頌が数えられる。碑銘は、仏・法・僧への帰敬と世自在 Lokeśvara 菩薩と仏母般若波羅蜜 Prajñāpāramitā への帰依が表明され (vv. 1-5)、建立者が大乘仏教の信奉者であったことを明らかにする。次に、vv. 6-18 に Jayavarman VII の世系が述べられる。カンボジア初期の王として Baksei Camkron 碑文 (K286) などから知られる Śrutavarman とそ

1) 岩本 [1981-1984] 参照。

の息子 Śreṣṭhavarman の名を挙げたのち、v. 8 に突如として Kambujarājalakṣmi という女性の名を記す。この名はこの碑文以外には知られない女性である。次いで、Veal Kantel 碑文 (K359) などから真臘独立の基礎を築いた王者として知られる Bhavavarman の名がみられる。その子孫のひとり Harṣavarman の娘 Jayarājacūḍāmaṇi が, Jayavarman VII の母である。Jayavarman VII の父 Dharaṇindravarman は, Jayavarman VI の妹の子 Mahidharāditya の息子である。家系に続いて, vv. 19-28 には Jayavarman VII に対する賛辞が記され, 王の出征と赫々たる勝利の凱旋が謳歌され, チャンパー (Campā) の王を捕虜としたのち解き放った王の寛容さが讃えられる。次いで, 王が師僧 (guru) とその家族に贈った財貨や名誉を記し (vv. 29-35), 1108年にいくつかの塑像を造営したが, その中には王の師僧ならびに王の母の像があったという (vv. 36-37)。次に, Ta Prohm 寺院で行われる種々の法令に必要な物品や必需品のリストが列挙される (vv. 38-50)。さらに, 毎年この寺院で消費される米の総量を記したあと, 農民や商人から徴収される物品とその量が明記されている (vv. 51-61)。vv. 62-82 には, 王や村落所有者から贈られた村落の数, ならびにこの荘園地に住む僧侶その他の人間の数, そこに貯蔵された金・銀その他の物資が明細に記される。最後に, 尖塔39, 石造建造物566, 煉瓦建造物288, 幅76尋・長さ1,150尋の池, 周囲2,702尋の城壁のあったことが記される (v. 79)。以上は, Ta Prohm 寺院の規模を示す記事として注目すべきである。vv. 83-116 は, Caitra 月 (3月-4月) の白分の8日から満月の日までの7日間にわたって行われる春の祭典について記され, この祭典に必要な物品が詳細に記される。vv. 117-140 には, 国内の各所に設けられた102の施療所 ārogyasālā に供給される数々の物

資のリストが記される。v. 141 以後には, これらの善根により, その功德が Jayavarman VII の生母 Jayarājacūḍāmaṇi の成仏の供養になることを懇請し, 最後の v. 145 に「この praśasti (頌徳碑) は Jayavarman VII の正嫡の王子 Sūryakumāra が建立した」旨を記して, この碑文は終わっている。

こうして, Ta Prohm 寺院は Jayavarman VII が母の追善供養のために建立したものであり, Angkor Thom の東側にある。この碑文の特色は前述のように, この寺院の経営に必要な物品のリストとその数量とを記載していることであり, 他に類似をみない。Jayavarman VII が父 Dharaṇindravarman II の追善供養のために建立した Pra Khan 寺院の碑文 (K908) にも若干の数字がみえるが, Ta Prohm 碑文の比ではない。本稿では, Ta Prohm 碑文の vv. 51-61 の Skt. 詩頌を和訳し, 若干の注釈を加えるとともに, そこに記される数量に関して試論を展開してみたいと思う。ただし, 原文は Coedès [1906: 51-62] および Majumdar [1953: 467-470] にみられるので, ここでは省略することにし, Text に問題があるときは訳注に記すことにする。

III

(51) [Ta Prohm 寺院の関係者のための] 食糧用の (pākya) 米穀 (taṇḍula) の量は 28,040 khāri, 1 droṇa である。

[注] Ta Prohm 寺院の関係者の人数は v. 67 に79,365人と記される。

(52) そのための (Ta Prohm 寺院の維持のための) 米 (vrihi) は〔前記の量の〕4倍の 112,161 khāri の量に達する。

(53) (その中で) 村 (grāma) などから徴収されるべき米穀は 4,093 khārikā, 3 droṇa, 2 kuduva である。

〔注〕Kuduva は Skt. kuḍuva に同じ。

(54) ゴマ (tila) は 183 droṇa, 6 prastha であり、豆類 (mudga) は 210 khāri, 2 droṇa, 10 prastha である。

(55) バター油 (ghṛta) は 400 ghaṭikā, 9 prastha で、酪 (dadhi) は 507 ghaṭi, 7 prastha である。

〔注〕仏典では、五味の名で、kṣīra, dadhi, navanita, ghṛta, sarpir-maṇḍa の5種の乳製品を列举し、漢訳では一般に乳味、酪味、生酥味、熟酥味、醍醐味と記される。

(56) 牛乳 (payas) は 586 ghaṭi, 1 prastha である。蜂蜜 (madhu) は 538 ghaṭi, 5 prastha である。

(57) 糖蜜 (gudda) は 480 ghaṭikā であり、ゴマ油 (taila) は 13 prastha の量に達する。

〔注〕Gudda は Skt. guḍa 「糖蜜」の転訛と考えられる。この語はこの碑文にしばしば記される。

(58) タル果 (taruphala) の油は 5 ghaṭi, 5 prastha である。織工の家から、村から、また織物の店などから、

〔注〕Taruphala がいかなる植物か不明である。Cordier [1906 : 82] は deodar (学名 Cedrus Deodar) すなわち「松柏科の植物」の果実とする。Coedès の出版 apanādeś ca vāsaśām は āpanādeś のミスプリントか。

(59) Yugala については40,095, さらにまた yugala の半分を徴収すべきである。

〔注〕前者の yugala は yugalānām と複数・属格、後者の yugala は yugalasya と単数・属格の語形で記されるが、yugala の語義不明。Khmer 語碑文では、例えば K79 [IC Vol. II : 69ff.] には canlek yugala yau 3 とあり、K726 [IC Vol. V : 75ff.] などには yugala yau 2 などとみえ、Coedès はいずれも vête-

ments doubles と訳す。石澤 [1982 : 154] には前者を「倍幅の布地」と訳すが、タイでは絹布の質（厚味）を表わすのに sen dio (1本), song sen (2本), sam sen (3本), si sen (4本) ということである²⁾ので、元来 Skt. で「一對」(漢訳では「雙」)を意味する yugala はカンボジアの古碑文では布地に関して「2本の糸を撚ったもの」の意に用いられたのであろうか。それにしても、Pada D における tathārdham yugalasya の意味は不明である。なお、ここに記される数字の単位は記載されていないが、上記の K79, K726 などにみえる yau と考えられる。

(60) 蜜蠟 (madhūcchiṣṭa) の総量は 17 bhāra, 18 tulā, 5 kaṭṭi と 9 paṇa である。

(61) 鉛 (śiśa) は 51 bhāra, 10 tulā, 3 kaṭṭikā であり、そして 1 頭の馬、女奴隷ふたり、2 頭の象。

〔注〕この詩頌の後半は、v. 53 を受けて村から徴収されるべきものと解すべきであろう。

以下、この碑文は、Ta Prohm 寺院の荘園として王および村落の所有者 (grāmavat) たちが純粋な気持から (bhaktitah) みずから進んで寄進した村落の数が3,140であること (v. 62), この寺院には400人の総代 (puṁs) と18人の長老 (adhikārin) と2,740人の僧 (kārin) のいたこと (v. 63), 使用人は2,232人で、その中で女は615人の踊り子であること (v. 64), そして、この寺院に寄食する者の総数はビルマ人 (Pukām)・チャムパー (Campā) の捕虜を加えて79,365人であること (v. 67) などを記す。さらに、金・銀・ダイヤモンド・ルビー、その他の宝石、銅・白銅 (kaṁsa, 銅と錫の合金) の量などを記すが、繁雑なので

2) 石井米雄教授のご教示による。

省略することにする。

IV

さて、vv. 51-61 に記される上記の数量について、果たしてそれが実際にどれだけの量であるかは碑面からは全く判らない。当時のカンボジアにおける度量衡も知られていない。しかし、そこに記される単位はすべて Skt. であり、従ってこれを古代インドの度量衡で試算しても、あまり大きな誤りを犯すゆえんではないと考えられる。

そこで、12, 3 世紀に属する治療法の教科書で、マガダ (Magadha) 地方 (現在の Bihar 州のガンジス河以南) の出であるシャールンガダラ (Śārṅgadhara) の書いた「シャールンガダラ=サンヒター」(Śārṅgadhara saṁhitā) に、古代インドの重さの単位 (paramāṇv-ādi-māna, 極微にはじまる単位) が述べられている [Renou; Filliozat 1953: 758]。それによると、次の計算式が成立する。

1 khāri = 16 droṇa
(khārikā)

1 droṇa = 16 prastha

1 prastha = 4 kuḍuva

1 kuḍuva = 4 pala =

1 pala =

1 tulā = 100 pala = 9,331.2 g

1 bhāra = 20 tulā = 2,000 pala = 186.624 kg

なお、1 paṇa は 1 pala の64分の1すなわち 1.458 g, 1 kaṭṭi (kaṭṭikā) は 1 paṇa の5分の1すなわち 0.2916 g であるので、無視することにする。

上記の単位の数値によって、vv. 51-61 に挙げられる数字を計算してみると、

(51) 28,040 khāri + 1 droṇa = 10,711,304 kg
(10,711.304 ton)

(52) 112,161 khāri = (42,845.502 ton), この数量は(51)の数量の4倍と記されているこ

とから考えると 1 khāri = 4 droṇa となる。インドの場合、単位は「極微」(ごくみ)にはじまるので、上記の表では 1 pala が基準になる。とすれば 1 khāri は約 96 kg となり、(51)にいう数字は総勢 8 万人になんなんとする人間を養うにはあまりにも僅少である。インドの単位では 1 khāri = 4 droṇi, 1 droṇi = 4 droṇa であるので、そこに何らかの混乱があるかと思われる。以下の計算はすべて上記インドの単位の数値に従うことにする。

(53) 4,093 khārikā + 3 droṇa + 2 kuḍuva =
1,563,526 kg + 72 kg + 0.746496 kg ÷
1,563.599 ton, 以上は「米」である。

(54) ゴマ —— 183 droṇa + 6 prastha = 4,401 kg,
豆類 —— 210 khāri + 2 droṇa + 10 prastha = 80.283 ton

(55) Ghaṭikā という単位は ghaṭa が「水瓶」の意であることから、液体を量る柁目と考えられる。Cordier [1906: 82] に ghaṭikā (ghaṭi) < ghaṭa = kumbha = kalaśa = droṇa と記すのに従えば、バター油 —— 400 ghaṭikā + 9 prastha = 9,613.5kg, 酪 —— 507 ghaṭi + 7 prastha = 12,178.5kg, ただし、上記の重さは水に換

算した重さであるから、現実には若干の差の生ずることは当然である。以下、同じ。

(56) 牛乳 —— 586 ghaṭi + 1 prastha = 14,065.5 kg, 蜂蜜 —— 538 ghaṭi + 5 prastha = 12,919.5 kg

(57) 糖蜜 —— 480 ghaṭikā = 11,520 kg, ゴマ油 —— 13 prastha = 19.5 kg

(58) タル果油 —— 5 ghaṭi + 5 prastha = 127.5 kg

- (59) Yugala の長さ——前述のように単位は明示されていないが、Khmer 語の yau が単位と考えられるが、数値不詳である。この碑文の v. 79 には、taṭāka (貯水池) の大きさを示すのに vyāma (両手を広げた長さ、‘尋’、約 1.83 m) を用いているが、ここではその 4 分の 1 に該当する hasta (45.72 cm) の単位を用いて計算してみることにする。40,095 hasta = 18,331.434 m
- (60) 蜜 蠟 —— 17 bhāra + 18 tulā + 5 kaṭṭi + 9 paṇa. 5 kaṭṭi + 9 paṇa = 14.58 g につき、これを計算外とすると、17 bhāra + 18 tulā = 3,172.608 kg + 167.9616 kg = 3,340.5696 kg
- (61) 鉛 —— 51 bhāra + 10 tulā + 3 kaṭṭikā. 3 kaṭṭikā = 0.8748 g を無視すると、51 bhāra + 10 tulā = 9,611.136 kg

以上をもって、試算を終える。数字の面白さにひかれて、インドの度量衡の単位に基づいて計算を試みるという遊戯に終わった感が深い。しかも、Ta Prohm 寺院というカンボジアの古都 Angkor の一寺院に関するもので、Khmer 帝国末期の一事象にとどまって全体または大体を示唆するものが何もないのが残念である。しかしながら、Ta Prohm 寺院のみに関係者約 80,000 人、食糧として所要の米穀量が 10,000 ton を超すということ（ひと

りあたり平均 125 kg 以上）で、Jayavarman VII 時代の Khmer 帝国の裕福と繁栄の一端を物語るともいえよう。

参 考 文 献

- Chhabra, B. Ch. 1935. Expansion of Indo-Aryan Culture during Pallava Rule, as Evidenced by Inscriptions. *Journal and Proceedings* 1 (1). Asiatic Society of Bengal (Letters).
- Coedès, G. 1906. La Stèle de Ta-Prohm. *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient* VI: 44–81.
- . 1966. *The Making of South East Asia*. London: University of California Press.
- Cordier, P. 1906. Notes additionnelles sur l'Inscription de Ta-Prohm. *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient* VI: 82–85.
- Inscriptions du Cambodge* (IC と略称する). 1937–1966. Collection de Textes et Documents sur l'Indochine, III. 8 Vols. Hanoi et Paris.
- 石澤良昭. 1982. 『古代カンボジア史研究』東京：国書刊行会。
- 岩本 裕. 1981–1984. 「ジャワ碑文研究」『南方文化』8–11.
- Majumdar, R. C. 1953. *Inscriptions of Kambuja*. The Asiatic Society, Monograph Series, Vol. VIII. Calcutta.
- Renou, L.; et Filliozat, J. 1953. *L'Inde classique, II*. Hanoi: École française d'Extrême-Orient.